登渡青年会会報

第2号
昭和61年12月31日
発行所
登渡神社社務所内
登渡青年会編集室
電話(42) 3403

（葛飾北斎―版画「富嶽三十六景」登戸浦）

登戸湊

登渡神社宮司
星次百太郎

かつての東京湾を望む登戸の地は、葛飾北斎の版画「富嶽三十六景」のうち登戸浦によって日本全国に知られるところである。この絵には登渡神社の所在する台地から海辺を通して望む富士山が鳥居の間に描かれている。

登戸の地は近世、登戸港として太平洋岸の九十九里で獲れた海の産物を出荷する海上交通の拠点として繁栄したところである。

西千葉総鎮守と呼ばれるこの神社周辺は、十辺舎一九が「登戸、この所より朝晝船出る、江戸の小網町から多くの遊び客がやってくる程のにぎわいを呈した所であった」

明治初年でも登戸村の船持ち衆、四十三軒、持船八十隻の記録があると言う。三四郎丸、伝八郎丸、徳久丸、オッサン丸、権次郎丸、虎丸、神明丸、八幡丸、船宿を合わせ営んでいたのは金七船、善七船、亀屋船、菓子屋船が知られています。

古老の話によりますと幕末の万延元年（一八六〇）の桜田門外の変に参加した水戸浪士は、陸路千葉に来て、登戸湊から伊勢詣りの衣裳で金七船に乗り江戸に渡ったそうです。事件後にそのことが判り、金七家では、後始末に多額の金を費したそうです。

明治二十四年の「千葉繁昌記」には、海漕店として金七船、菓子屋船、薪炭問屋に斉藤三五郎が載っております。また茶屋旅篭に木村屋、富士見屋、真砂屋、大野屋、大阪屋、菊屋、武蔵屋があったそうです。

登戸港の繁昌ぶりは、次の俚謡で想像できるでしょう。

登戸宮野河岸　遠浅なれば
三味や太鼓で船つなぐ

登戸新地は、イカリがつなぐ
今朝も出船よ三艘でる
天神山　元をただせば鬼が出る

今は女部屋で繁昌する

また、最初の県会議員当選祝に県令による招待宴会は登戸で行なったと伝えています。

葛飾北斎（一七六〇～一八四九）

西千葉
総鎮守

登渡神社略記

鎮座地　千葉市登戸三－三－八

神社名　登渡神社（通称登戸神社）

御祭神　天御中主神　高皇産霊神
　　神皇産霊神　天日鷲神

御神徳　天御中主神　高皇産霊神
神皇産霊神の三柱の神様は造化三神と称えられ宇宙の初めの時お生まれになられこの世の中のあらゆるものを初めてお造りになられたという御偉業から、災いを除き、人を苦しみから救い、あらゆるものを生み育て、お守りして下さる霊験あらたかな神様と仰がれてます。

御由緒　当神社は正保元年（一六四四）九月五日、千葉家の遺族、登戸椎介平定胤が祖先を供養するため千葉妙見寺（現在の千葉神社）の末寺として妙見大菩薩を奉斉し、僧定弁に守護させたのがそのはじめと伝えられ、その後、慶応三年（一八六七）に登渡神社と改め御祭神を天御中主神以下の造化三神に定め、明治四十一年に登戸字鷲塚鎮座、鷲神社を合祀し、四柱の神様をお祭りすることになり、後、昭和四十八年御鎮座三三〇年記念臨時大祭を執行し、現在に至る。
また氏子崇敬者が千葉市西部地区全域に及ぶ所から特に西千葉総鎮守と称えられ広く一般の人々から尊崇されております。

御社殿　総欅造り、銅板瓦葺屋根、奥行四門、間口四間の伽藍構造で嘉永三年（一八五〇）信徒の浄財五百両をもって、葛飾郡八木村の棟梁紋次郎の施工により完成し、昭和六年の大修理を経て現在に至る。
御社殿の諸彫刻は信州上諏訪の立川内匠正の作りになるもので、その精巧壮麗さの故に、昭和四十三年千葉市文化財として指定される。

タイムカプセル

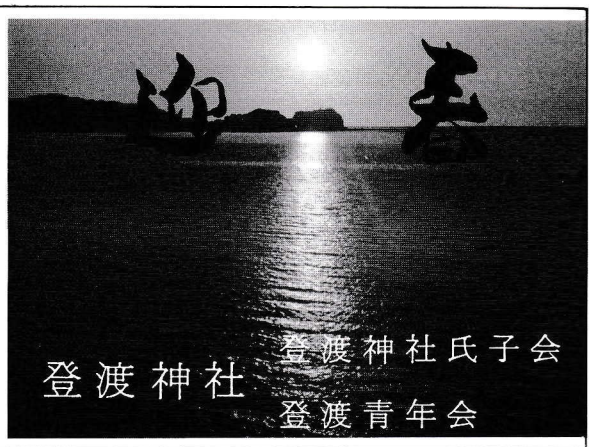
登戸新千葉二丁目氏子会支部長　佐野尚男

私が登戸新千葉二丁目自治会長を引受けて早くも三年目となりました。その間、登渡神社の祭礼、元旦、節分、水神、浅間祭等、種種のお祭に参列させて頂きました。その度に神官の起居振舞、祭壇の飾り、雅楽の奏でるを見ると、これ等の形式は一体どれ位以前に確立されたものであろうかと思いを廻らすのです。少なくとも日本に絹織物が入り、都を中心とした国家が成立した時には存在したのであろうと思いますので、おそらく一千有余年の歴史がある儀式と考えられましょう。神官の装束は聖徳太子を連想させますし、祭壇上の三方も古代の出土品とほとんど同一です。又、しめ縄や玉串も同様に一千年の伝統を今に受け継がれているものと思われます。
　とすると現在参列している私は服装こそ現代人ですが、一千年前と同じ所作をして、一千年前に生きていた人々と同一の気持になれる様に思えて来ました。それからと言うもの、私は祭礼の度に神殿に上り、一千年前の人間になったつもりで参列しております。
　登渡神社では、この一千年前の時に触れられる時間が約一時間続きます。神は八百萬の神々と言われて、その人の心に決めた神様がその人の神様であると思います。神官の壮厳かつ厳粛な祝詞を聞き、それ等に伴せ深々と二礼、二拍子そして一礼する間にお願いをします。誰れでも出来る一千年前との遭遇です。この時タイムカプセルは開かれているのです。
　登渡神社の祭礼の際には、いつでも一千有余年前のタイムカプセルが皆様の御参拝を待っているのです。時間よ戻れ、一千年前に。

－川　柳－

〃木の葉散り
　海は何処か
　　常夜燈〃

〃宮の前
　ランドセル等も
　　手を合せ〃（幸男・吟）



神社と宮司

登戸新千葉三丁目氏子会支部長　中島廣蔵

わたくしごとで恐縮ですが、わたしの名はコウゾウと読みます。登渡神社で付けてもらったのだそうです。名付けてくれたのは今の宮司さんのお父さんのお父さんか、あるいはその上のお父さんかも知れません。何しろ、わたしは今、七十才ですから。

小学校の頃は、コウチャン、コウコウ、沢庵コーコーと言われて何ともはや、嫌な名前だと思って自分で自分の名前を言うのが大変嫌でした。しかし五十才を過ぎてから、ある時自分の娘から、お父さんの名前は字画の数がだんだん増して行ってるね、と言われて、字画を数えてみると、四、十、十五、二十、とほぼ等差数列を成しています。そこで今までのことを振り返ってみますと、何か転機に従って、生き方を変える毎に、前よりも状態が良くなって来た様な気がして、これは、ことによると年を取るごとに良くなるのではないかと、大いに勇気付けられる様になりました。

今まで、神社などにお詣りしたところで何になると、不貞腐れていたところでした。これは神社の神様の御力か、いや、名付けてくれた宮司さんのおかげか、どちらだろうか、いや、両方かなと思っています。何れにしても、今では大いに感謝して、名付けられた通りの字画で、堂々と自分の名前を書いています。

祈る心の尊さ

登戸四、五丁目氏子会支部長　高梨桂二

私は終戦前八年間登戸小に勤務し、其の間毎日のように出征兵があり、登渡神社先代宮司の司祭により祈願が行なわれ、心から武運長久を祈り、上級生代表の楽隊で千葉駅まで見送った思い出は忘れることはできない。登渡神社の氏子はその加護によって、幸せな日日を送っていることを有難く感謝し祈る心を大切にしたいと考えている。この度登渡青年会がこの点に着目し、一致団結して登渡神社を守護し、諸行事の際は特に協力体制を見事に整え細部に至るまで心くばりを行っている姿は実に立派である。人間は宗教心によって心の糧をもち生活を正したいのである。世界平和と国家、並びに家内の安全、更に自己の進展を祈り続けたい。

敬神崇祖は

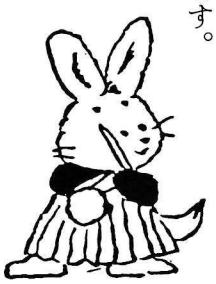
汐見丘、春日氏子会支部長　平山信義

私は昭和十六年より十七年にかけ登戸交番勤務をしたこと、登戸二丁目に住んでいたことなどから登渡神社に縁のあるものの一人であります。

登渡神社氏子会汐見丘、春日支部の一員として氏子の方々、登渡青年会の皆様に親しく接し、諸氏が神社の諸行事に参加し、神徳宣揚に積極的に努めておられることを、ありがたい事と感激している次第であります。

登渡神社および地域発展のため、星次宮司を中心として、登渡青年会員が一丸となり、次代を荷う後継者になって下さることを心から祈念するものであります。

私は敬神崇祖はいつの世でも日本人の行動の原理であると信じております。



青年会

青年会代表　西澤英男

三年目を迎え、三十一名の会員のもと、やっと地に足を着け、一歩一歩その行跡を辿り前進しております。

人はこの世に生を授かり物事の節目、折り目に神に祈願し、その恩恵を授かる。

神社を母体とし地域の方々と神の名の基に「出合い」「参加」し「交流」を計り、大きな輪となり広く世へ羽搏け大空へを基に登渡氏子会の下、青年会は活動しております。

「目的」

「この会は登渡神社のご神徳に感謝し、諸行事を助勢すると共に相互の親睦を計り、ご神徳を宣揚する事を目的とする。」

以上の主旨に御賛同の方御入会下さい。詳しい事は近くの会員、又は登渡神社々務所迄(42)三四〇三

最後に、会員の皆様この一年御協力ありがとうございました。

ゆく年、くる年、地域の皆様のご健康とご多幸をお祈りし今後共宜しく御願い致します。

登渡神輿

青年会々員　吉井広育

登渡神社の神輿は、二年に一度九月五日に町内渡御されます。神輿は、大きさもさることながら重さも米俵十六俵分あるといわれ、棒を入れると約千kg強あり、神輿を飾る金物はすべてむく材が使われ、彫刻類は一日見ていても飽きない程見事な物です。又、聞くところによると、二年に一度の謂(いわれ)は江戸末期町内渡御の際に事故か喧嘩かは分らないが、ともかく死人が出てお上から永久禁止が下り、気性の荒い漁師町の人々は、それは落胆したそうです。そうして数年後、佐倉藩藩主時の老中堀田様が自国に入る際船を使い登戸沖で引潮の為船が動かなくなり、登戸の漁師がこれは一大事とばかり、各々の持ち船を並べその船の上を渡り、無事に岸に上ることが出来、この行為を大変喜こばれた堀田様は、「何なりと望みをとらす」と言われ、意気と気性で生きている漁師は、金品を望まず「以前のように神輿をもませて下さい」と申し出、それに対し「登渡の神輿はあまりの荒さから死人が出たので、今後、静かにおとなしく渡御することが出来るのなら、二年に一度に限り許す」こうして現在に至っていると言われています。

地域の先祖が代々残し守って来た遺産を、各家々は祭りの日には登渡神社の祭礼提灯を門、あるいは玄関の両側に上げ、出来ることなら神輿に参加してもらいたいものです。登渡神社を古き良き時代の時のように、地域生活の中心として崇拝する事は、主義主張の異なる現代では不可能なので、せめて新年の初詣は登渡神社に行くべきです。特に氏子界隈の住人は。

最近では色々な媒体により、神社もブランド指向になり、有名な神社へ行きたがるようですが、そもそも初詣とは旧年の無事を感謝し、新年の願いを地域の総鎮守である氏神様に参拝すると言う事であり、わざわざ遠い所に出向いても初詣本来の意をなしていないと思います。私達も地域社会の一員として少しでも神社関係に興味又は感心を持ちたいと思う。

旅行

1泊

笠森観音
笠森保養センター

61年4月12～13日、登渡神社氏子会主催による笠森保養センター一泊旅行が行なわれました。

氏子会の方々の心遣のもと、青年会、西千葉商店会の方々と、より友好を深め親睦を計る一泊旅行が氏子会10名、青年会11名、西千葉商店会2名参加のもとに心を一つにして和やかな中、有意義な一夜を送る。

おやしろシリーズ(1)

登渡神社宮司
星次百太郎

家庭での神棚のまつり方

家庭のまつりは、昔から神様を祭る神棚と祖先を祭る祖霊舎（単に霊舎ともいう）や仏壇があり、朝夕、感謝の祈りを捧げて、なごやかな明るい生活をする元となっている。その精神は

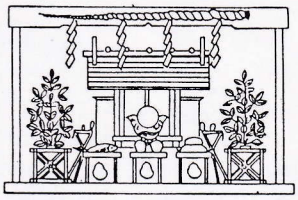
目に見えぬ神にむかひてはじざるは、人の心の誠なりけり

という明治天皇の御製にお示しになっておられる通りである。神まつりは、この気持を深めるためのものであり、特に家庭のまつりは、生活上の重要な実践要素になっている。

毎日の参拝を重ねることによって感謝と報恩の気持が深められてゆく。朝早く起きて洗面し、身も心も清めて神棚や祖先の霊舎を拝し、清々しい気持で生業につくことは、その日を充実せしめるであろう。神々は誠を持ち信仰ある人を必らずお守り下さり、祖先の御霊は見えざる力を添えて助けて下さるのであって、これによって正しい人生が作り上げられて行くのである。

《神棚のまつり方》

神棚は一家の中心になる神聖な所であるから、清浄で静かな、高い場所に設ける。それと同時に、家族にとって親しみやすい明るい感じのこころが一番適当である。



そして、毎日お供え物をしたり拝むのに都合のよいところを考えることが大切。

神棚の方向は南向き或は東向きが良く、大きさは適宜でよい。お宮形の大小、お供え物の都合、装飾の仕方によって鋪設する。

神棚の中央にお宮形を納め、扉の正面にお鏡を据え、左右にお榊や灯明具を立て、前面には注連縄（向って右が太い）を掛けるのが普通である。

御神札は、伊勢神宮の大麻（天照皇大神宮）と氏神さまの神札を、年の暮れに氏神（登渡神社）さまよりいただいてお宮形に納めて、新しい年を迎えるのが古来の仕来たりである。

植樹祭

61年4月29日、青年会一周年を期し、折りしも天皇陛下御在位六十年の記念すべき時に、天皇陛下誕生日の4月29日の良き日に境内で宮司、西澤代表、登渡神社氏子会本部長金子武氏、役員三門辰夫氏御夫婦、会員十二名参加のもとに鍬入が行なわれ五葉松が植樹された。この五葉松は宮司が兼務されている源町鎮座の氏子増田実氏の多大なる御協力を得ました。

昭和61年度例大祭斎行さる

（61年9月4、5、6日）

親子三代祭

—神輿渡御について のお願い—

六十二年例大祭は本祭の年、神輿渡御の年にあたります。神輿渡御に際し、神輿を担ぐ時には敬神の精神のもと担いで下さい。

●神輿の上に乗らない事

●履物は白足袋着用

以上の事、守って下さい

登渡神社氏子総代
祭典委員長　金子武

〃お知らせ〃

登戸のお囃子は、松井旭市長がわざわざ足を運び他の指導をお願いに来る程の技術である。この技術を登戸地区に於ても後世に伝え様ではありませんか。

又、神輿渡御を主体に神輿事に関する一切の仕事を通し、神社奉仕を目的とする登渡睦會会員は現在三十九名です。

青年会活動報告

昭61・2・25　会報創刊号発行
3・1　第六回会合。バス旅行、植樹祭について。
4・13　氏子会、青年会親睦笠森観音一泊旅行。
12-13
4・29　植樹祭。一周年を記念し境内に植樹。
6・21　第七回会合。親子三代祭について。
8・2　第八回会合、例大祭、親子三代祭りにつき。
8・17　親子三代祭り子供神輿渡御に助勢。
8・31　例大祭を迎えるにあたり本殿・末社、境内の清掃。
9・4　例大祭につき演芸、早朝境内の清掃等諸事を助勢する。
5・6
9・7　後片付け。
10・4　第九回会合、会報二号発行について、提燈作製について、神輿を担ぐ態度、服装について。
チェンソー贈呈
11・8　会報二号発行にあたり編集会議。
12・6　第十回会合。
12・28　新年を迎えるにあたり本殿・末社、境内の清掃。

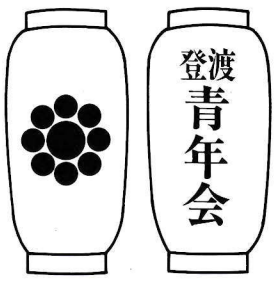
※滝口会員が常日頃、自発的に境内の清掃、整備をして頂いているとの宮司さんからの御言葉がありました。御苦労様です。

登渡青年会会員名簿

西澤	英男	稲田	四郎
斉藤	幸男	西郡	久雄
三門	康浩	滝口	清治
中村	正夫	古川	増雄
須田	茂夫	渡辺	統道
石出	一三	吉井	広育
原	俊夫	西郡	饒
櫻木英一郎		鉄炮塚正一	
浜田	俊明	中島	仁吉
高橋	金吉	古島	一良
大場	敏男	高橋	秀行
小川	秀一	高橋	秀樹
遠藤	久司	石橋	毅
阿部	和夫	賀畠	豊
小池	良三	浜田	長平
青木	俊幸		

青年会、堤燈出来る。

神輿渡御の折り、初詣の交通整理、境内整理へと青年会の弓張提燈が皆様の目に留る事と思います。



編集後記

会報も第2号の刊行になりますが、これからが正念場です。会員一同、地域の皆様に親しみ易い誌面作りを目指して前向きに取組んで行く所存です。神社や青年会についての卒直な意見を御待ちしています。

今回の発行に当り登渡神社氏子会支部長の方々にお忙がしい中、玉稿を賜わり誠にありがたく感謝に耐えません。

御意見、御希望、又、会報を御希望の方は神社社務所迄

(42)三四〇三　青年会編集室